書評「星空の紙飛行機」村上靖子（講談社），ひびき，No.2，1991

村上靖子さんは童話作家でもある。ガンで亡くなった友人田中育美さん宛ての４０通の手紙がこの本のすべて。愛や生、死といった普遍的な事柄をテーマに考えを深めていく村上さんの姿勢に共感すると同時に、友人の存在の大きさに認識を新たにする。

半年の命を宣告されてからの育美さんには夫の蒸発や母親の死、最愛の子供たちとの別れ（里子に出した）を経てホスピス入院と、壮絶な生の日々が待ち受けていた。

「いかにして充実した、くいのない、やさしさにあふれた日々を生きるかということが、私たち人間の最大の、そしてたったひとつの要点だと思うわ」

「まばたきするほどの短い、たった一回きりの人生よ、みんなひたすらに生きているわ。笑われようと変人だと言われようがただひたすらにいきている」

「幸福な人間というものは、自分を管理できる人のことをいうのだと思う」——などと言い切ったり呟いたりする育美さんの死を直前にした言葉がぐさりぐさりと胸に刺さってくる。障害の子供がいることで自分の行動に言い訳したり簡単にけりをつけたりすることは許されそうもない。

感情に流されて自分を失い、気分が落ち込んだときは、育美さんの詩が心にしみてくる。

焦点　　　　　　　田中育美

私は病気　病人　それもひどい死に到る病の中にいる
でも病気の部分を切り離してみると　心も目も耳も頭も
ずいぶん健康なところが残っている。いやほとんど健康。
その部分だけがチョッピリ病気
焦点をどこにもっていくか
病気の部分か　健康の部分か
そうすれば　この一日が変る

育美さんは遠くへ往ってしまったけれど、育美さんが残したものを村上さんは伝えている。大きな暖かい心を伝えている。